

# 秋田県における雪害防止育林技術の研究について

秋田県林業センター

浅利和栄

今年度から育林の研究を担当することになりました。前任者の武田英文さんが農林事務所林務課に転任になり、その試験課題を引き継いでおりますが、研究については初めてですので、目下勉強中というところです。どうかよろしく御指導お願い申し上げます。

本県民有林の人工林率は、現在およそ50%に達していますが、これの最終目標は60%とされており、また人工林の90%はスギ林です。このスギ人工林について、低齢級林分の割合が多く、また保育手遅れ林分が増加しつつあること、今後の拡大造林は高海拔・多雪地にむかうことなどのために雪害面積が増加しつつあるのが現状で、雪害防止問題は古くて新しい問題として常に育林科の最重要な課題となっています。

本県における雪害は幼齢期における根元曲がりや殆んどで、この被害が大なり小なり全林地にわたって発生する恒常的な被害となっており、冠雪害については林分内で極く少数は毎年発生していますが、突発的に生ずる大被害は発生していません。しかし多雪地においては、積雪による生育初期の押し倒され、その後の幹折れなどにより、手入れで放置するとおよそ20年生頃の林分閉鎖時には植栽本数が半減するとされており、雪害を回避する育林技術を欠かすことはできません。

本県の最深積雪深分布は、民有林は2.5m以下の多雪地帯に属し、海岸部は1m以下の少雪地帯となっています。いわゆる2.5m以上の豪雪地帯はないわけですが、山地の積雪は標高・地形によって大幅に変化し、さらには昭和49年のような豪雪年もありますので、民有林においても積雪によって非常に不成積になった林分、あるいは成林が困難な林地もみられるのが実態です。このようなことから、研究としては、まず積雪環境区分問題をとりあげて検討しています。

当林業センターで、現在とりあげている試験項目は「積雪環境と雪起しの作業体系に関する研究」「雪害抵抗性クローン試験」の二つです。雪起しについては、労力不足に加え、農繁期と重ることから容易には実行されませんが、根元曲りは材積収穫においておよそ20%の損失をもたらしていることとされ、また良質材生産のうえで大きな障害となっていることから、今後大いに指導していきいたい課題である。雪害抵抗性については、秋田天然スギの中で高海拔地にみられる桃洞スギ・鳥海ムラスギおよび人工造林地から選抜した耐雪性個体について育種部で検定林を設け、研究部では試験植栽地を設けている。

根元曲りは、積雪の量・質・山地の傾斜などの立地条件、品種・系統の抵抗性、保育方法などの総合作用によって大きく影響されているが、今後の研究としては、地域の立地条件に応じた苗木・植付け等からの一連の育林技術体系について検討していきいたい。また、最近は保育間伐手遅れの過密株分がふえて冠雪被害も多くなる傾向があるのでこれの検討もしていきいたい。